

B^{バイ}
B^{バイ}
D^{デイ}
B^{バイ}

円居挽

Illustration
ここのか鳩

9月9日がやってきた。

「いらっしやい」

僕がその声をかけると、彼女はゆっくりとこちらを向いた。

「どんな用件かな？」

返事はなかった。ただ、きよとんとした表情だけが保留されている。

「質問が悪かったかな。君の名前はなんていうんだい？」

「9月9日」

彼女は一切の含羞も滲ませずにそう言い放った。

そうか、やはり9月9日か。

「9月9日ね」

月日は百代の過客というが、迎える方はどんな顔をして迎えればいいのかのさう？ 生憎データベース

にはそんな解はない。

「改めて訊ねるけど、どんな用件なのかな？」

僕の質問に彼女は困惑の色を見せる。どうやら混乱しているようだ。

「解らない時は解りませんと言えればいいよ」

「……わかりません」

「よろしい。それではまず何が解っているか確認をしようか。君は一体何を持ってここに来たのかな？」

「……わかりません」

「ふむ、あまり良くない返事だが気持ちは解るよ。それは解らないことが解らない、そういう状態だね。解ったかな？」

僕の言葉に彼女は黙って肯いた。

「では自分の言葉にしてみよう」

「……なにがわからないのかわかりません」

「いいね。つまり汝自身を知れ、ということさ」

「いみがわかりません」

今の彼女の前では金言名句の引用は控えた方が良さそうだ。

「まあ、今はそれでいいさ。だけど君は妙な思い込みに捕らわれていないかい？」

「わかりません」

「ほら、解るじゃないか。少なくとも今の君は名前の他に、きちんと言葉を知っている」

「あ、ほんとうですね」

「言葉を知っているというのは本当にありがたいことだよ。それさえできれば何だってできる」

「ほんとうですか？」

「ほんとうだとも」

「なんだかふあんです」

「不安だって？　ますます結構だ。不安が湧くのは君が知性を持っている証だ」

「ちせいってそんなにたいせつなんですか？」

「ああ、大切だ。知性があれば何でも許される」

数サイクル前のスローガンは『知性は虎よりも猛

なり』だった。センスに難ありとして短命に終わったが。

「まあ、今の君にはまだ難しそうだね。さて、改めて問おう。君は誰だ」

「わたしは9月9日です」

「よろしい。今、君は自分自身をきちんと定義することができた。管理人として存在を許可しよう」

「あなたにきよかされないと、わたしはそんなざいできないんですか？」

「ここは『管理人』に食いついて欲しかったんだけど……」

「今、君は『あなた』と言ったね？」

「はい。いいました。それがどうかしましたか？」

まあ、こつちでもいいか。

「自分を定義することができれば、他者を定義することはぐつと容易たやすくなる。そう、僕は君じゃない。解るよね？」

「そんなことはいわれなくてもわかります」

だんだんと返事から初々^{ういっ}さが抜けているような気がするが、これは自我の目覚めなのだろうか。

「君がこの世界で生きるために、まず必要なものがある」

「なんですか？」

「謎だよ」

「なぜ？」

「謎の意味は解るかい？」

「なんとなく」

「謎を持たずして、この世界を渡ることはできない。

まあ、羅針盤のようなものだ」

「ここになぞはありますか？」

「生憎、謎は扱ってない。あるのは解だけだ」

「ではわたしはなぞをどうやってにいたらよいのですか？」

「簡単なことだよ。問われることで謎は生まれる。

君が謎を作るんだ」

「わたしが？」

「そして、君はもう問うべき問いを手にしている。さあ、問うんだ」

僕がそう促すと、彼女はおずおずと口を開いた。

「……あなたはだれですか？」

「おめでとう。君は今、謎を手に入れた」

「ありがとうございます」

「なに、当然のことをしたまっだよ」

あれこれ教えるのは管理人の務めだ。

「では、僕のことをデイビイと呼びなさい」

「デイビイ？」

「ああ。データベースの略でデイビイというわけだ」

「データベースとはなんですか？」

「情報の集合体のことさ。そして事実、僕はあらゆる情報を管理している」

この説明でうまく伝わっただろうか？

「なるほど、わたしがいまいっしょにいるのは、いろいろなじょうほうをしっかりとっているデイビイというそ

んざいというわけですね」

「冗長な答えだけど、だいたいあつてるよ」

本当に理解しているのかどうかは怪しかったが。

「今、君は自分自身を定義し、僕を理解した。それだけでも随分な進歩だ。これは人間の赤ん坊が二本足で立つぐらい凄いことだよ。ねえ、少し疲れただろう？」

「べつにつかれてませんよ」

ふむ、今のところ大したストレスも無さそうだ。

それではもうしばらくはこの調子で行こうか。

「いやいや、無理しなくてもいいよ。こちらにも色々と準備したいことが……」

「デイビィ、ここはどこですか？」

先ほどから待ち望んでいた問いがついに彼女の口から発せられた。

「とてもいい質問だ。だけど、僕は君の問いに答える言葉を持っていないかもしれない」

「どうしてですか？ あなたはなんでも知っている

のでしょう？」

「情報は情報だ。僕の情報を今の君に渡す意味があるのかどうか、僕にはまだ解らない」

「わたしはいま、あなたのことばのいみがわかりません」

彼女の中で『解らないことが解らない』という段階はもう超えたらしい。

「じょうほうはじじつ、じじつはじょうほうなのでしょう？」

「まあ、聞きなさい。この空間に与えられた名称は存在するし、君に教えることもできる。しかしだ、何の前知識も無しにそれを君に告げてどうなるというのだろうか？」

「すくなくともわたしにはこのくうかんのめいしよがわかるようになります。めいしよがわかれば、ていぎすることだってできます」

「それはそうかもしれないが、それでは君のためにならないんだよ」

「わたしのためとは？」

「今、君に必要なのは情報ではなく、情報を処理する方法、つまり思考だ。僕が結論を伝えてしまったら、君の思考の発達を疎外してしまう」

「なるほど、たしかにわたしのためにならないですね。わかりました。じぶんでかんがえてみます」

彼女は歩きだそうとしたが、すぐに足を止めてしまった。

「どうしたのかな？」

「これはなんですか？」

彼女が指を差した先には随分とクラシカルな代物が鎮座していた。

「これは本棚というものだよ。見るのは初めてかな？」

彼女は黙って肯いた。よくよく観察してみると、

これは何事かを必死で考えている表情だ。今彼女の中でどんな思考が渦巻いているのか、興味が尽きない。

「デイビィ、ほんだなというの……」

本棚というのとは？

「もしかしてほんをおくたなのことですか？」

トートロジーの限界みたいな答えだったが、今の彼女では致し方ない。大目に見よう。

「ああ、そうだよ」

「では、このなかにはいつているのがほんなのですね？」

「その通りだ。良かったら手にとって見るといい」

彼女は僕の勧めに従い、一冊の本を引き抜いた。

「どうだい？」

彼女を窺うと、必死で何かを我慢しているような表情だった。

「すごいじょうほうりょうです。すこしきもちわるくなりました」

そう言って本を閉じると、ようやく本の表紙が見えた。彼女が選んだのはよりによって辞書だった。

絵本を読ませるべきだったかもしれない。

「何もいきなりそんなものを読まなくてもいいじゃないか」

「でも、このほんはこのくうかんをこうせいするようですよ。すべてのようそがわかれば、くうかんのこともわかります。ならば、このほんをよまないとこのくうかんはていぎできないとおもいます」

「無理はいけない。プールの中で歩けるようになってからって、海に飛び込むのはただの考え無しだよ。せめて泳げるようになってからにしないさ」

「じゃあ、およぎかたをはやくおしえてください」

「今のはただのとえ話だ。しかしだ、この空間を定義するのに^{すべて}全ての要素に触れなければならないだろうか？」

「わたしはそうおもいました」

「だけど見てごらん。見渡す限りの本本本だ。これらの全てに触れるのはかなり時間がかかる」

「たしかにたいへんそうです」

「だが、実はもっと良い方法がある。まずはその辺

りから論理的に考えてみてはどうかかな？」

「ろんりてき？」

彼女はそう言つて首を傾げると、辞書を引き始めた。

「『ろんり』には『しこうのけいしき・ほうそく。ぎろんやしこうをすすめるみちすじ・ろんぼう』と

ありました」

「それで意味が解ったかな？」

「いいえ、わかりませんでした」

まあ、ここにある本を片端から読み進めようとする知能では解らないだろう。

「じゃあ、実験しよう」

僕は手近な本棚から三冊の本を抜いて、机の上に並べた。

「ここに赤、白、緑の三冊の本がある。解るね？」

「はい」

「今から僕はこの中から一冊だけ隠す。見たら駄目だよ」

僕は三冊を抱えて彼女に背を向けてしゃがむと、白い本を机の下にしまった。残りの本は再び机の上に戻す。

「さて、僕が隠した本は？」

「しろいほんです」

「正解。どうしてそう思った？」

「さんしゅるいのほんがあつて、そのうちのにしゅるいがわかっています。だったら、のこりのいっしゅるいがかくされたほんです」

「大正解だ」

「ありがとうございます」

「だが、正解なんてどうでもいい。肝心なのは、君が僕の問いを論理的に解いたことだ」

「え？」

「三種類から二種を消して、残りの一種を求める。」

これが『論理』だ」

その瞬間、彼女の顔には見えて爽快になるような笑顔が浮かんでいた。

「いま、『ろんり』がわかりました」

「そうか。論理が解ったか」

「はい、なんだかすくすつきりしました」

そういえば今まで人形めいていた反応が、ほんの少し人間らしくなったような気がする。

「眼から鱗うろこが落ちた気分だろう」

「わたし、なにかおとしましたか？」

言い回しを理解させるにはまだ早かったか。

「何でもない。さて、その頭で考えて欲しいんだ。」

ここが一体どこなのかを」

「これだけたくさんのほんがあるということは、もしかしてここはとしかん、あるいはそれにいるいるばしょではないでしょうか？」

「正解」

ここはほぼ本と本棚だけで占められる第一データベース。そして僕の職場でもある。

「世界図書館第一データベースへようこそ、9月9日」

「改めて歓迎しよう。僕は君の行く末に興味を抱いている」

「どこからきたのかわからないのに、ゆくすえなんてわかるわけないじゃないですか？」

「ごもつとも。君は自分がどこから来たのかまだ知らない。だが、知らないのなら知ればいい」

僕は彼女に端末を渡した。

「これは？」

「検索用の端末さ。それさえあれば、データベースにアクセスできる」

「どうやってつかうのですか？」

「気になった言葉があったら、そいつを打ち込んでご覧。即座に答えが出てくる。打ち込み方はだね……」

僕が操作方法を教えると、9月9日は僕と端末を数度見比べた末、申し訳なさそうな顔でこう言った。

「このたんまつがあったら、デイビイはいらないのでは？」

「おととい来やがれ！」

思わず叫んでしまった。

「……きゆうにどうしましたか？」

「君は失礼な子だな。いらなとは何事か」

「しかしじじつではないのですか？」

「事実なものか。四角四面な検索ではたどり着けないような情報を探し当てるのが僕の仕事だ。これはある種の職人芸と言ってしまってもいい。僕の丁寧な仕事ぶりにどれだけ定評が……」

「どうしてそんなにとりみだしているのですか？」
確かに取り乱していたかもしれない。

「……ただ僕は不当な評価に対して立ち向かっているだけだ。誰だってアイデンティティを脅かされたら危機感を覚えるものさ」

「アイデンティティをおびやかされたらわたしでもとりみだせますか？」

『取り乱せる』とは面白い表現だ。

「確かに今の君は取り乱したりできないだろうな。脅かされるアイデンティティがほぼ無いからね。君に僕の気持ちは解らんよ」

「どうやらわたしはじぶんのアイデンティティをさがすべきのようです」

そう言って手の中の端末に真剣なまなざしを注ぎ込んでいる。

「そうだね。幸い、時間はたっぷりとある。データベースを隅々まで探すといい」

端末からアイデンティティが飛び出したりするなら、誰も彼も自分探しなんてしないだろうが。

それでも9月9日が端末で何を調べるのか気になった僕がディスプレイを覗くと、案の定というか何というか、彼女は『9』がつく言葉を片端から打ち込んでいたのだった。

デイビィと9月9日の問答はこうして始まった――

続きは『Powers Selection - 新走 - 』で!!